高校生が担い手となる自転車立哨活動の効果に関する考察

国士舘大学理工学部　学生会員　○山下　浩一朗
国士舘大学理工学部　正会員　寺内　義典
日本大学理工学部　正会員　稲垣　具志
二子玉川商店街振興組合　非会員　橋　たか
世田谷区土木部交通安全自転車課　非会員　福島　恵一

1. 背景と目的

東京都の自転車関連事故割合は 34%と全国平均を大きく上回り、自転車対歩行者事故は、東京都の割合が 31%と非常に高い[1)]。こうした背景もあり、都内は自転車の安全への関心が高いと推測されるが、なかでも東京都世田谷区二子玉川駅周辺地区では、地域住民が警察・行政・学校・事業者ら多様な関係者と連携し、自転車対策を推進している。平成 27 年には、その一環として、高校生が交通安全啓発の担い手となって立哨活動が実施された。本稿は、参加した高校生の意識の変化と立哨の効果について考察する。

2. 対象地域における自転車問題と取り組み

対象地域は、駅・商業施設を起終点とする自転車の多くが生活道路を通行し、多様な自転車問題を抱えている。立哨活動の対象とした地域を図 1 に示す。地点 1 は、自転車の一端不停止が常態化し、出会い頭事故の危険性が高い交差点である。地点 2 は自転車通行不可の歩道にもかかわらず、路外駐輪場の出入りのために歩道を走行する自転車が多い。

地域団体である二子玉川地区交通環境浄化推進協議会は、問題箇所に対するローカルルール（たまチャリルール）を制定した。地点 1 では、路上に足をつけて停止する「足ポン」を、地点 2 では、自転車を降りて歩く「おしチャリ」をするものとした。これを地元の S 高校の協力のもと、上記ルールを啓発する立哨活動の担い手として生徒 40 人が参加した。

3. ワークショップおよび立哨活動の概要

立哨に先立ち、地域の交通課題や自転車の正しい知識を理解し、地域の交通安全活動の担い手意識を高めるワークショップを実施した。ワークショップと立哨の概要を表 1 に示す。これを、自転車問題を担当する行政職員と地域に精通する地元商店街理事、大学の研究室が企画・実施した。地点 1 の立哨の様子を図 2 に、おなじく地点 2 の様子を図 3 に示す。

4. 調査結果

初回と最終回にルール認知度テストとアンケート調査を実施し、高校生の意識の事前事後の変化をみた。アンケート内容は、自転車交通安全教育の内容に対する理解と担い手意識である。

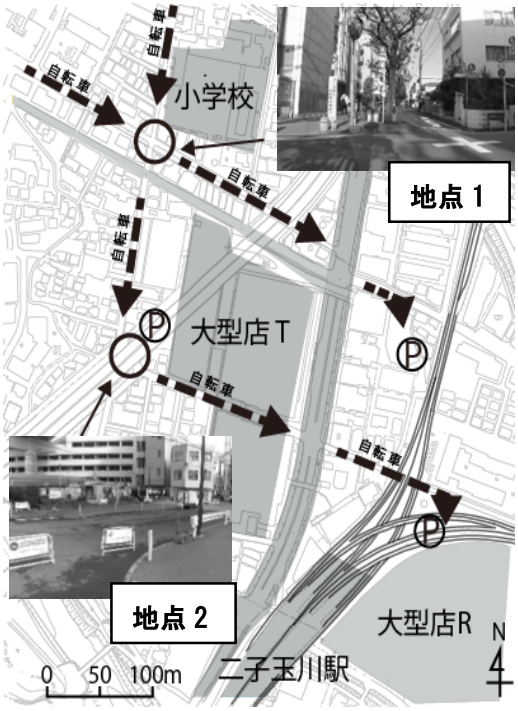

図 1　対象地域

表 1　ワークショップと立哨の概要

参加者		S 高校に通学する生徒 40 人
時間		ワークショップ　13:15～15:05 立哨　13:35～14:40
ワークショップ	自転車交通安全教育の実施（9/4, 11）	・自転車の危険性の体験（校庭） ・区職員による区内の自転車利用実態やたまちゃりルールに関する授業（教室）
	高校生の担い手意識の向上（10/16, 30）	・クルマに対する立哨体験（路上） ・危険箇所の問題確認（路上） ・パネルのデザイン（校庭・教室）
立哨	立哨による自転車利用者の改善（11/13）	・立哨活動の実施（路上）

キーワード　自転車、交通安全、住民参加

連絡先　〒154-8515　東京都世田谷区世田谷 4-28-1　国士舘大学理工学部理工学科 Mail:s43a023t@kokushikan.ac.jp

またビデオ映像から効果を把握するために、立哨の有無による自転車利用者のふるまいの変化を台数カウントにより計測した。

（1）自転車の安全利用に関する意識

事前アンケートは 39 名、事後アンケートは 40 名が回答した。ルール認知度テストでは、事前の段階ですでに高い平均点であった。自分の自転車運転マナーについての回答結果を図 4 に示す。事前では「大変よい」「ややよい」とする回答はあわせて 3 割程度であったが、事後では約 1 割増加した。

（2）担い手意識

「大人の自転車マナーを改善したいと思うか」との問いに対する回答を図 5 に示す。事前で 6 割超がある程度の意欲を持っていた。事後では、それがやや高まり 8 割強に達し、さらに「思う」という強い意欲の割合も 4 割弱まで増加した。

（3）立哨の効果

立哨有無比較のために、立哨実施時と前日同時間帯にビデオ撮影をおこない、地点 1 では立哨有 119 台、立哨無 136 台のサンプルを得た。「足ポン」実行の有無を比較した結果を図 6 に示す。立哨有では 8 割以上の人が足ポンをおこない高い効果が得られた。また、地点 2 のおしチャリも、サンプル数は少ないものの高い効果が得られた。

なお自転車への立哨は、初めての試みであったことから、立哨を担当した高校生が自転車利用者から受けた反応を、アンケートにより確認した。その結果を図 7 に示す。一番多い反応は「笑顔」であり、参加した高校生は比較的ポジティブな反応を多く受け取っていた。心配されたネガティブな反応としては、「目をそらす」「睨む」が多いものの、怒られる・叱られるといった厳しい反応はごく少数であった。

5. 結論

本稿では、高校生が担い手となる立哨活動事例を通じて、参加者の意識変化と自転車行動への影響を示した。立哨は、大きな効果が得られ、ネガティブな反応は少数であった。今後、ルールの定着をめざし、継続的な立哨と効果検証が必要であろう。

謝辞

参加された高校生と世田谷総合高校、また二子玉川地区交通浄化推進協議会の皆様に活動を支えていただきました。深く感謝申し上げます。

参考文献

1） 警視庁交通部：平成 26 年度東京都の交通事故

図 2　地点 1 の立哨（足ポン）の様子

図 3　地点 2 の立哨（おしチャリ）の様子

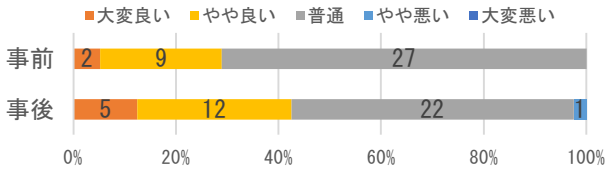

図 4　自分の自転車運転マナー評価

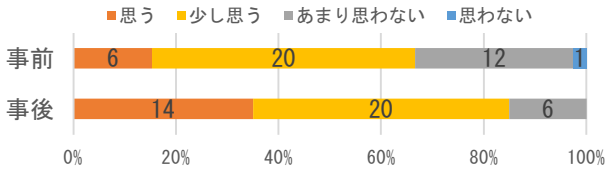

図 5　大人の自転車マナー改善への意欲

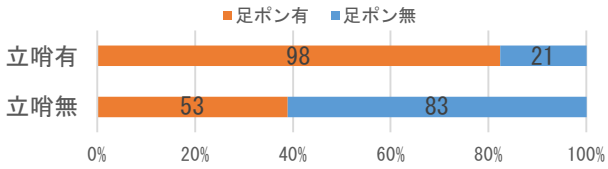

図 6　地点 1 の立哨（足ポン）の効果

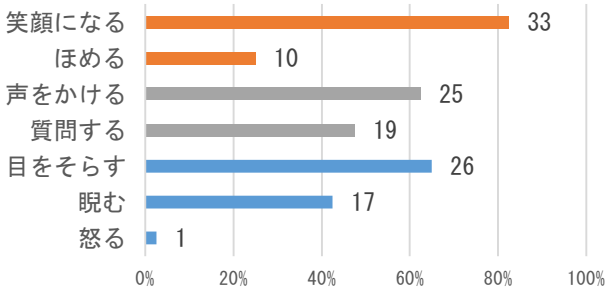

図 7　立哨に対する自転車利用者の反応